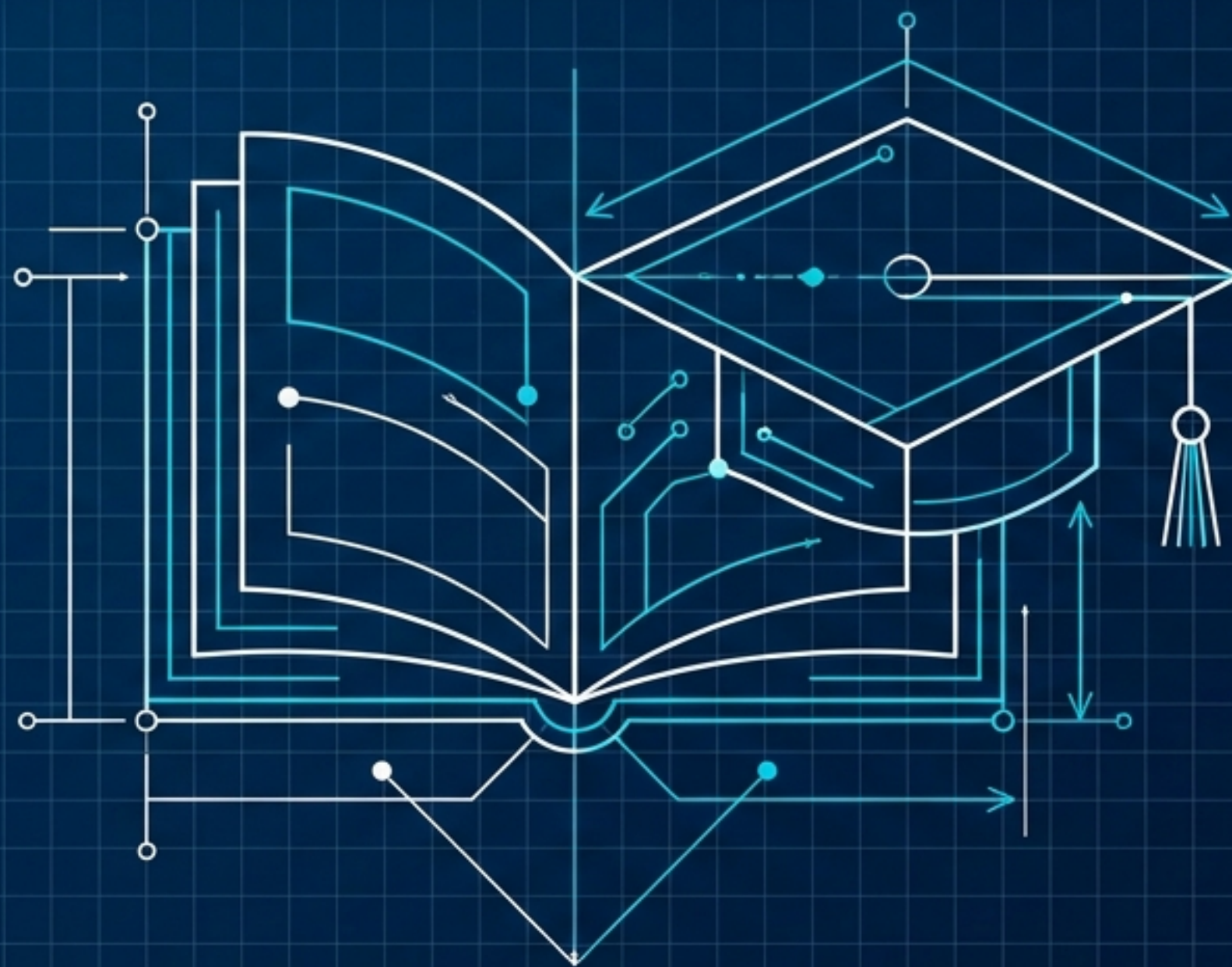


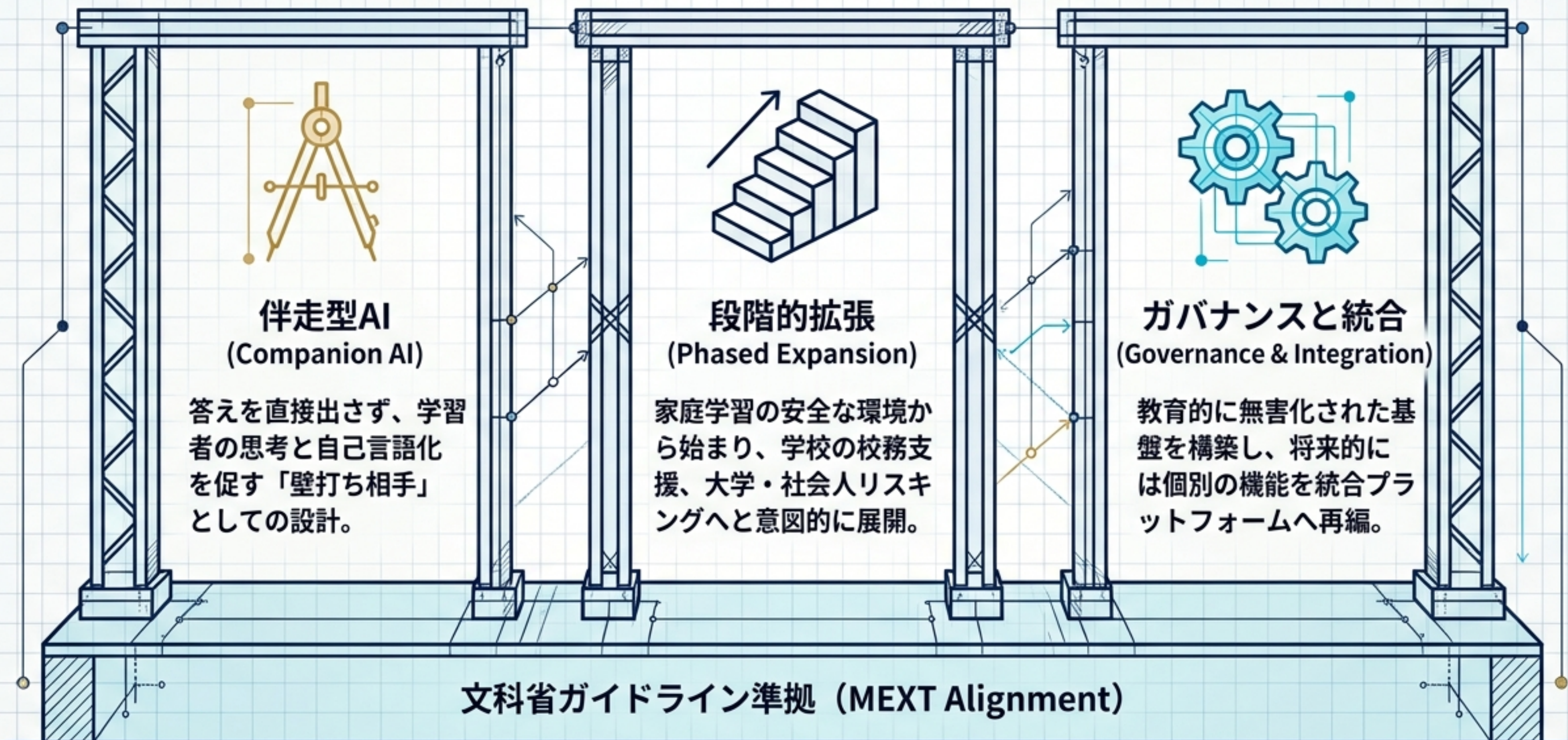
ベネッセの生成AI戦略：安全な“小さな実装”から教育プラットフォームへの進化

教育における生成AI活用の現状・分析・将来展望

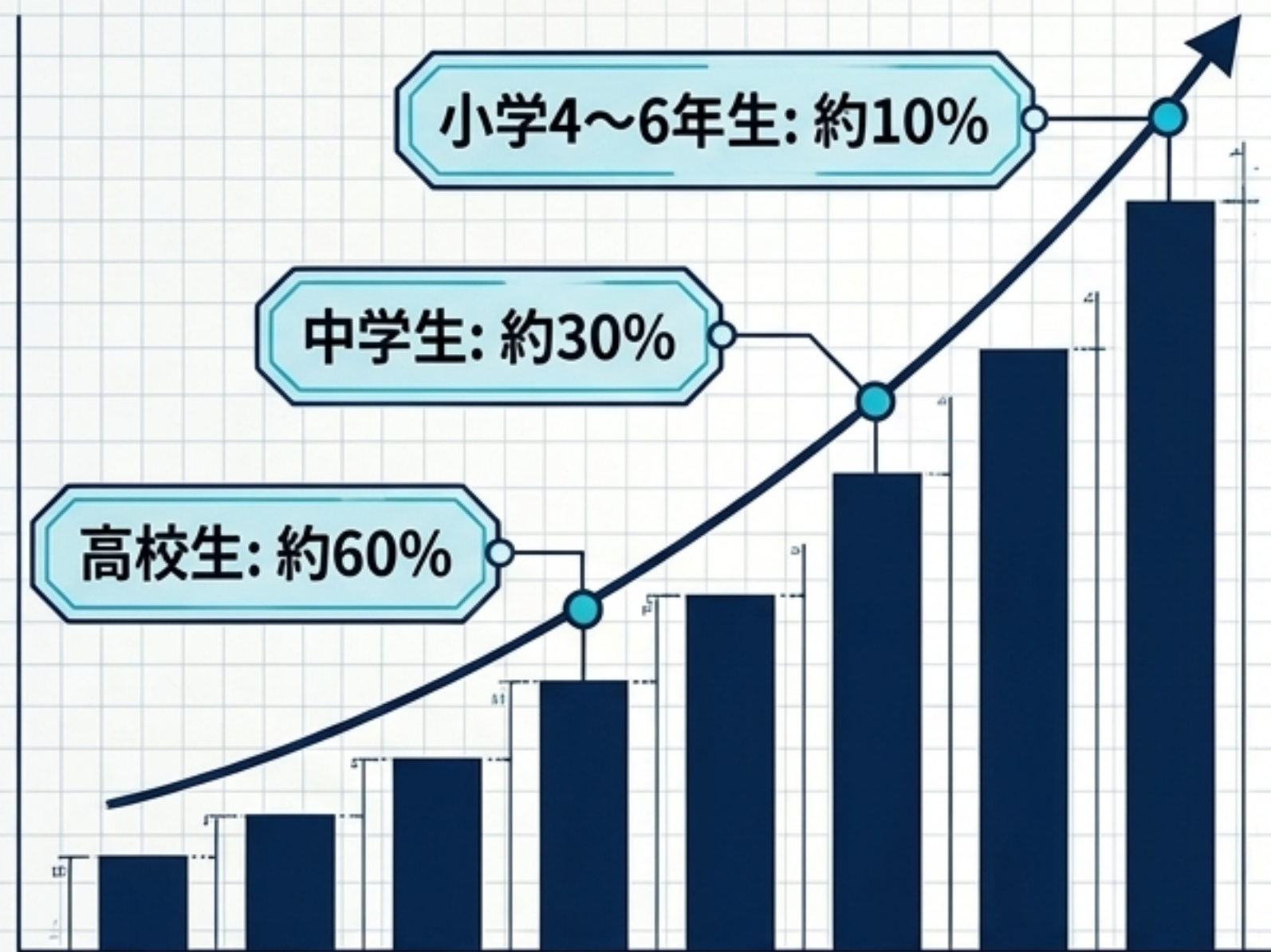
A Strategic Teardown of Benesse's Generative AI Integration (2023-2026)



ベネッセはAIを「避ける」のではなく、強固なガバナンスで「教育的に飼いならす」フェーズを牽引している



現場のAI普及は過渡期にある中、学生の利用率は学齢とともに急増している



高校生: 約60%

中学生: 約30%

小学4～6年生: 約10%

「学齢が上がるほど利用が拡大。
生徒の自発的利用は止められない段階」

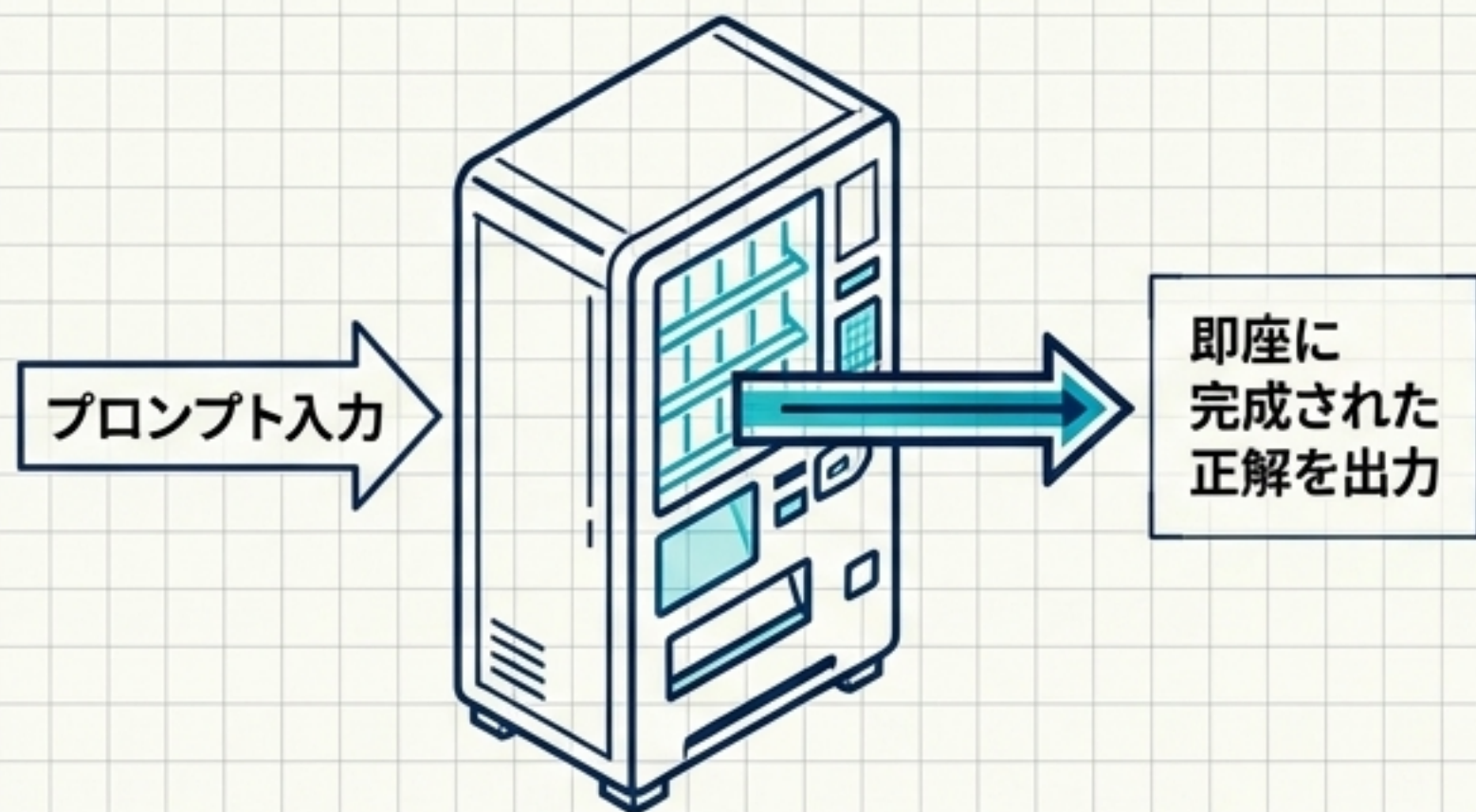


校務で生成AIを
「全く活用していない」
学校の割合
(2026年11月時点)。

文科省ガイドラインVer.2.0への完全準拠。
保護者同意、ヒント型応答、目的外利用
抑止により「人間中心の原則」を担保。

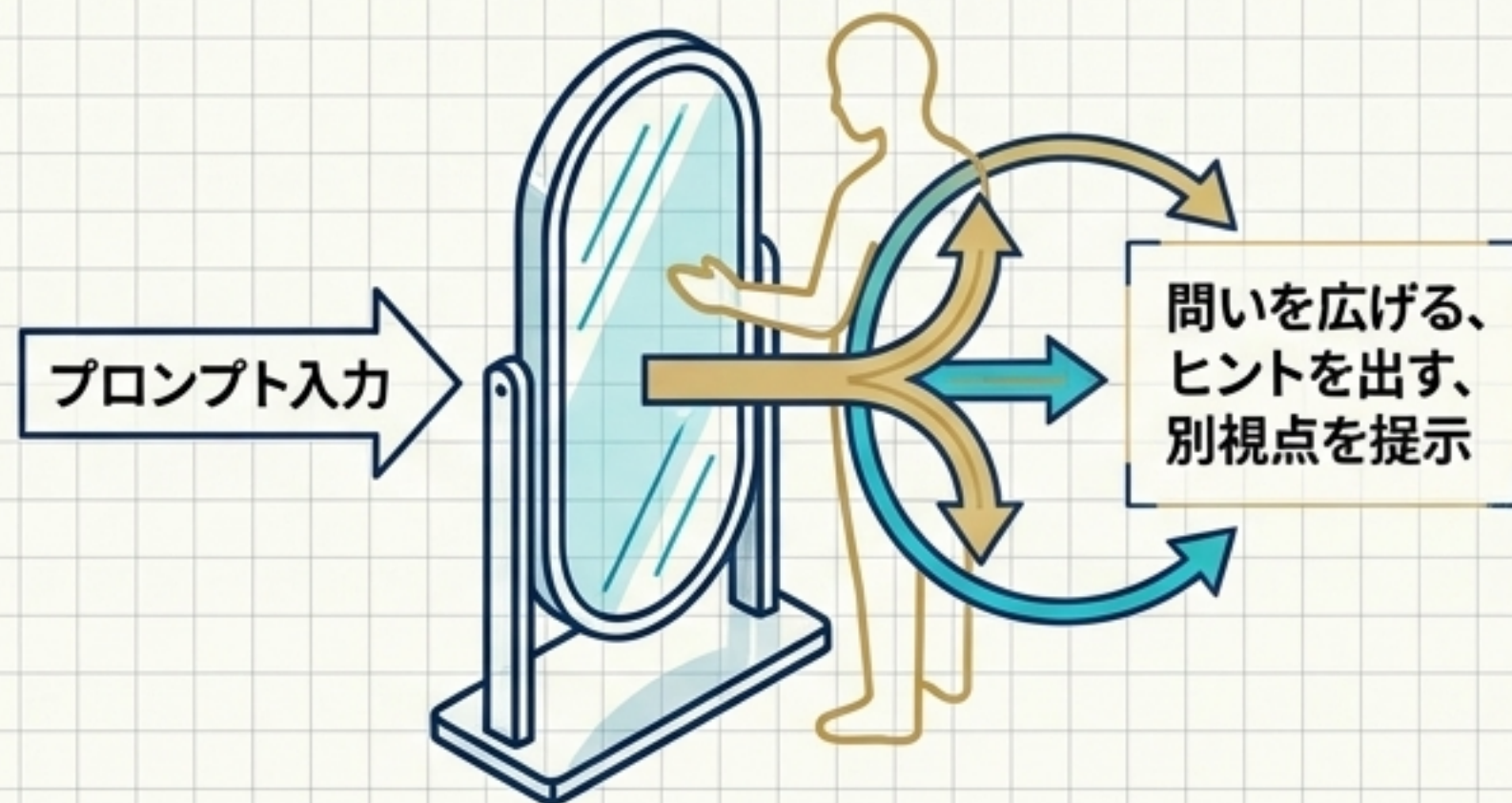
ベネッセの生成AIは「答えを出す」のではなく、「思考を引き出す伴走者」として機能する

一般的な生成AI (Answer Engine)



結果：思考の短絡化、試行錯誤の喪失

ベネッセの伴走型AI (Companion AI)



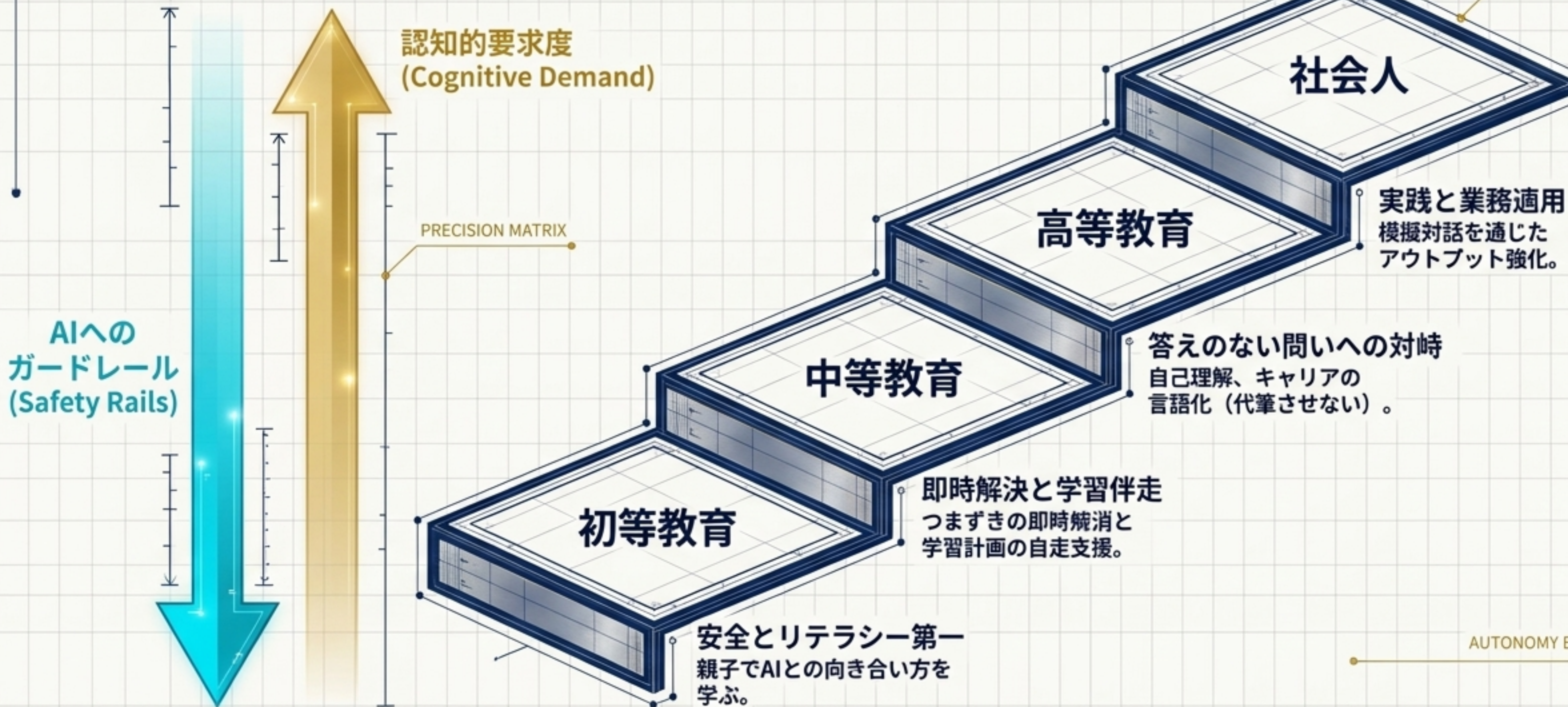
結果：自己理解の深化、情報リテラシーの育成

Evidence Box

大学向け「キャリアチュートリアル」が打ち出す“答えを出さないAI”という逆転の発想。

学齢が上がるにつれて、AIの役割は「疑問解消」から「自己言語化の壁打ち」へと高度化する

PRECISION MATRIX



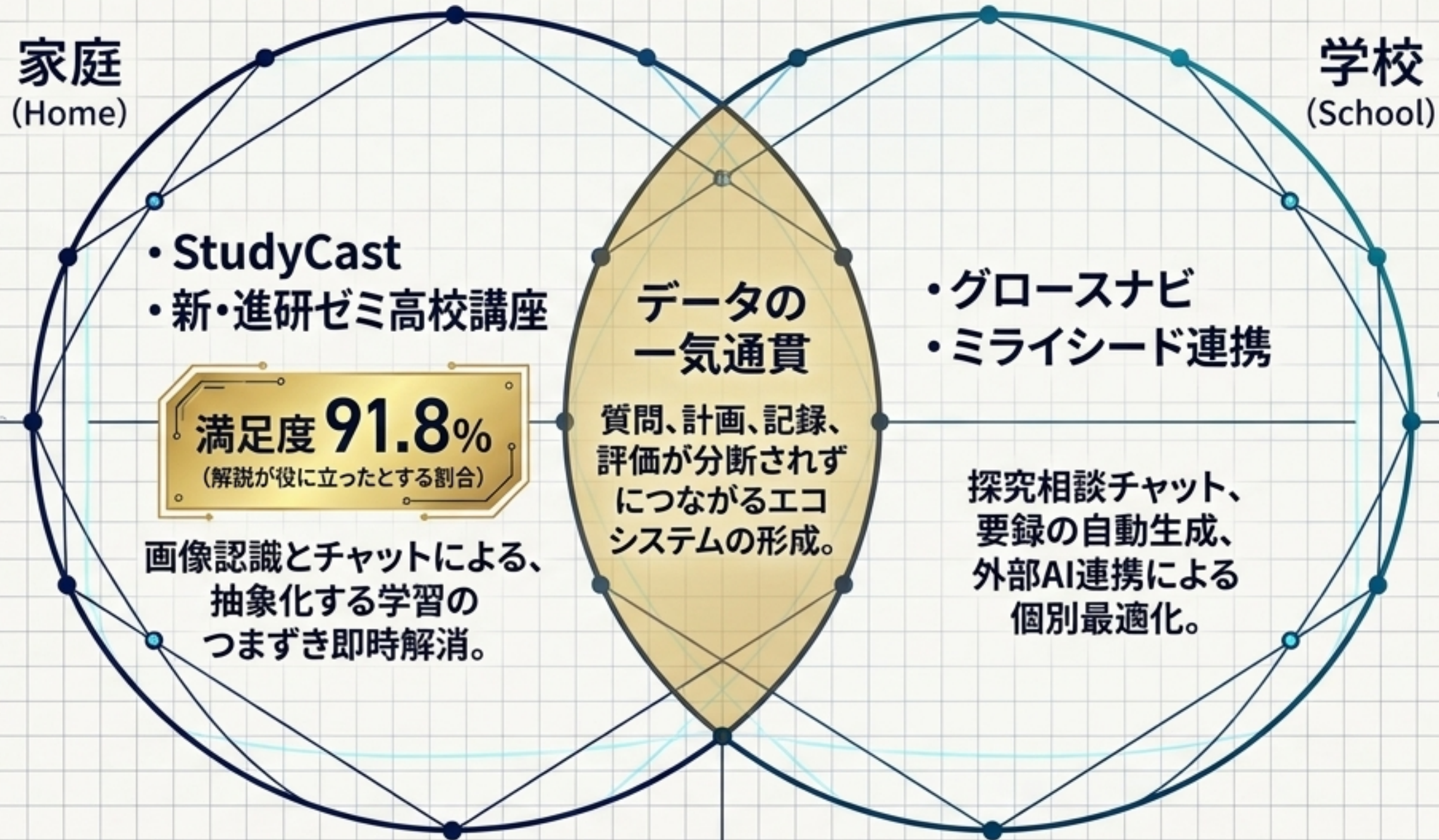
初等教育ではAIを使わせる前に、まず「親子でAIとの向き合い方を学ぶ」安全な環境を構築する



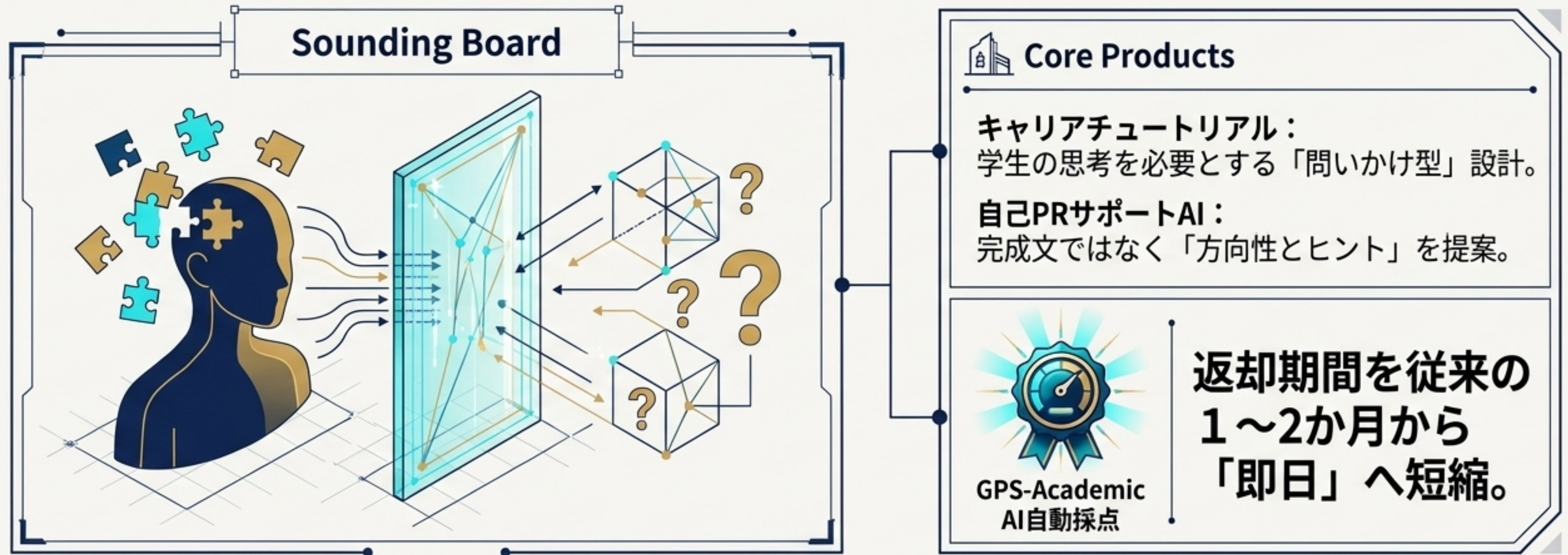
Key Insight Box

AIそのものを教えるのではなく、事前リテラシー動画を含め、「管理された経験」を通じて情報リテラシーの基礎を築く意図的な設計。

中等教育以降は、家庭での「即時な疑問解消」と学校での「探究・校務データの統合」が交差する

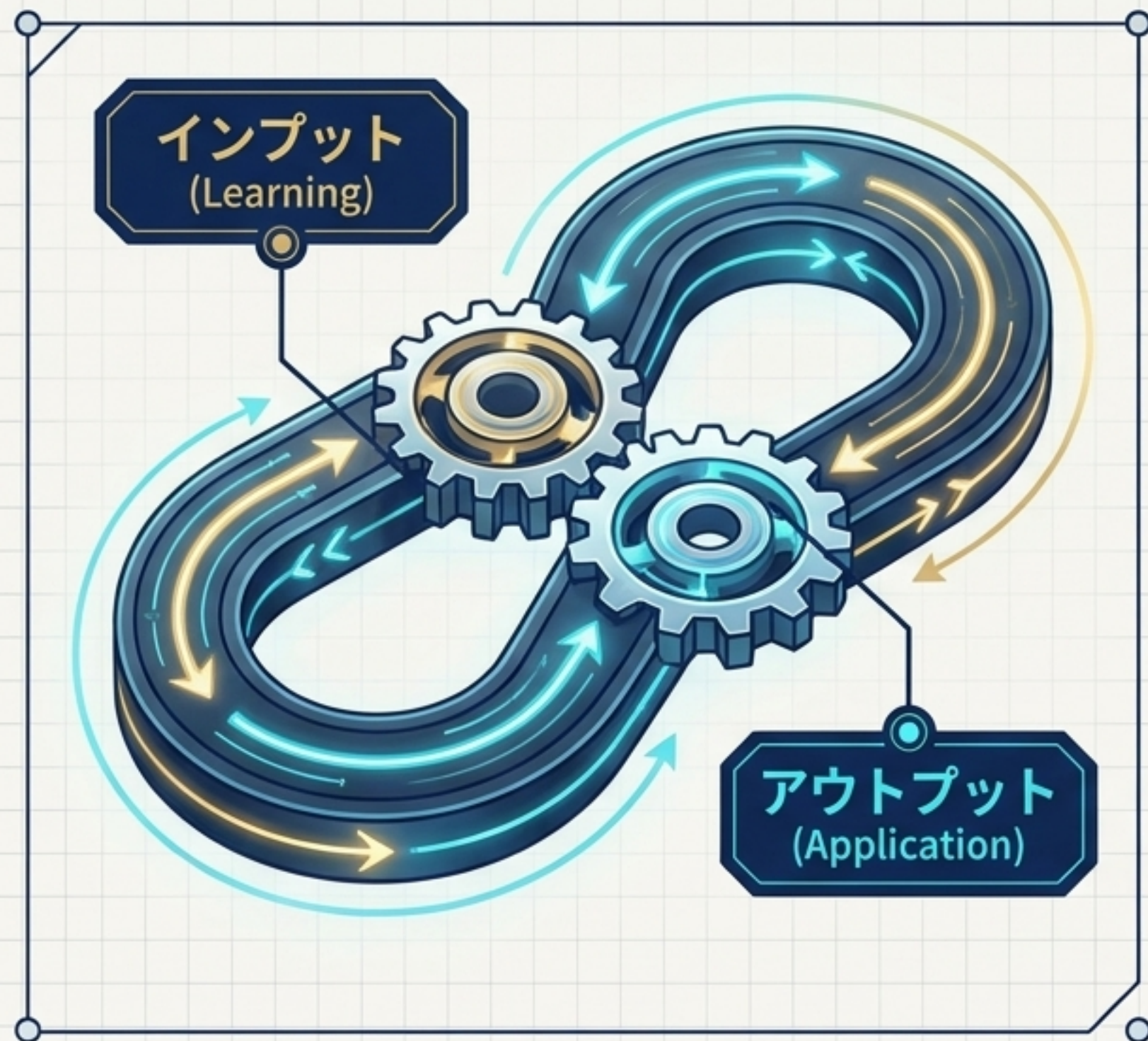


高等教育では「正解のない問い」に向き合うため、 あえて“答えを出さないAI”が自己理解を深める






戦略的背景: 就活での生成AI利用者の約3割が「自分がわからなくなった」と回答する
リスクに対する明確なアンチテーゼ。「代筆」を防ぎ、メタ認知を支援する。



社会人領域では、知識習得から模擬対話を通じた「実践アウトプット」へAIの役割が移行する



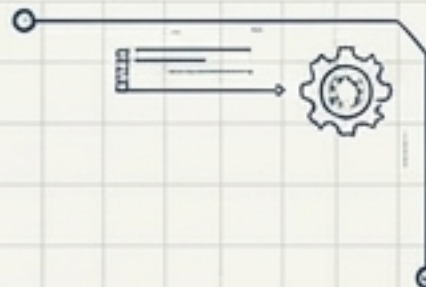
Udemy連携による実践転移

-  **AIアシスタント/スキルマッピング:** 学習中の即時質問とスキルの可視化。
-  **AIロールプレイ:** 模擬対話による実践転移。インプットを即座にアウトプットへ橋渡し。
-  **生成AI×資料作成研修:** 「何をAIに任せるか」を再設計する業務研修。

企業導入事例

-  **伯東:** 全社員にUdemyと生成AIアカウントを付与し、98%が活用。
-  **日清食品HD:** 管理職と自律学習者の両輪でAI活用文化を醸成。

すべての外部サービスは、全社規模の内部運用と「人間による品質管理」を経て実装されている



全社導入

Benesse Chat導入。
グループ社員約1.5万人が安全な閉域環境で利用。



外部サービス化

安全性と有用性が担保された機能を教育現場・家庭へ提供。

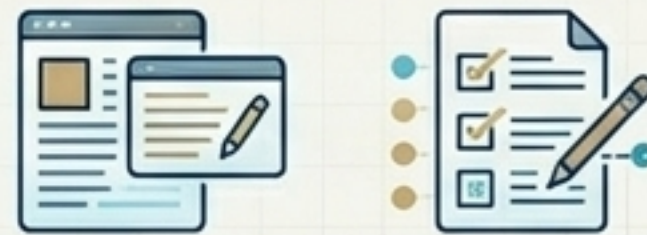


ワークフローの制度化:
AIに叩き台を作らせ、人間が確認する



業務・教材での実験

Classiでの原稿執筆、EDUCOMとのテスト素案作成実証。

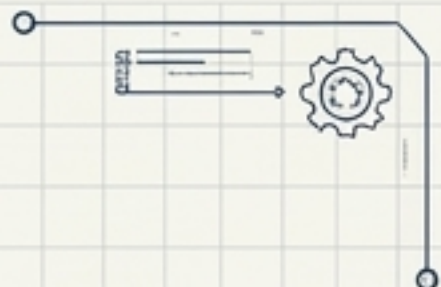









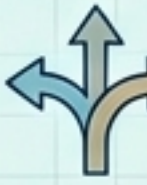
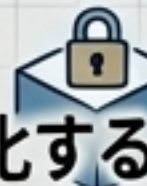

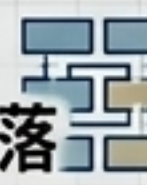
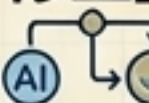


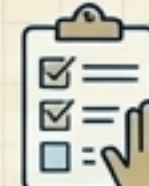
人間による品質管理

Human-in-the-Loop。教員や専門家によるファクトチェックと最終確認。



教育現場へのAI導入には明確な利点がある一方、特有の教育的リスクと不可欠な対策が存在する

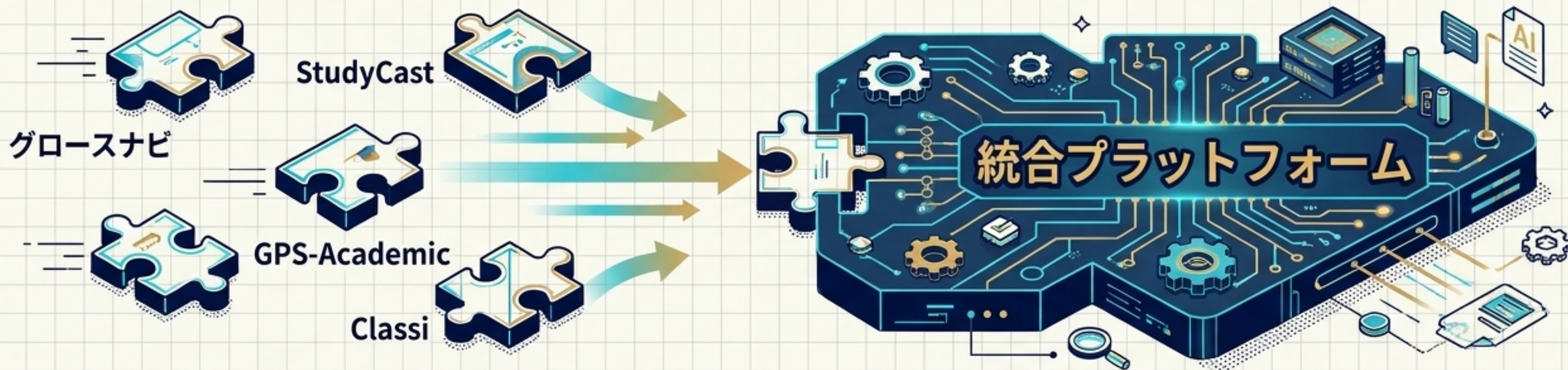


観点	利点 	リスク 	主な示唆・対策 
 即時性	24時間・即時解説で つまづきを解消 	試行錯誤を 短絡化しやすい 	即答ではなく「考えさせる 即時支援」の実装 
 個別最適化	学習履歴や進路に 応じた支援 	推薦プロセスが ブラックボックス化する 	教師や学習者に最適化の 根拠を説明できる設計 
 教員負担削減	要録や学校通信、 テスト素案の作成短縮 	文章の画一化、 ローカル文脈の欠落 	「AI生成→人間レビュー→修正」 のワークフロー明文化 
 評価の高速化	記述採点・返却の 大幅な短縮 	AI判定の誤差、 評価妥当性への懸念 	形成的評価から導入し、 重要判断では人手を併用 

単体のAI機能群は、学習・評価・進路・校務を一気通貫でつなぐ「統合プラットフォーム」へと再編されつつある

現在: 個別機能の提供

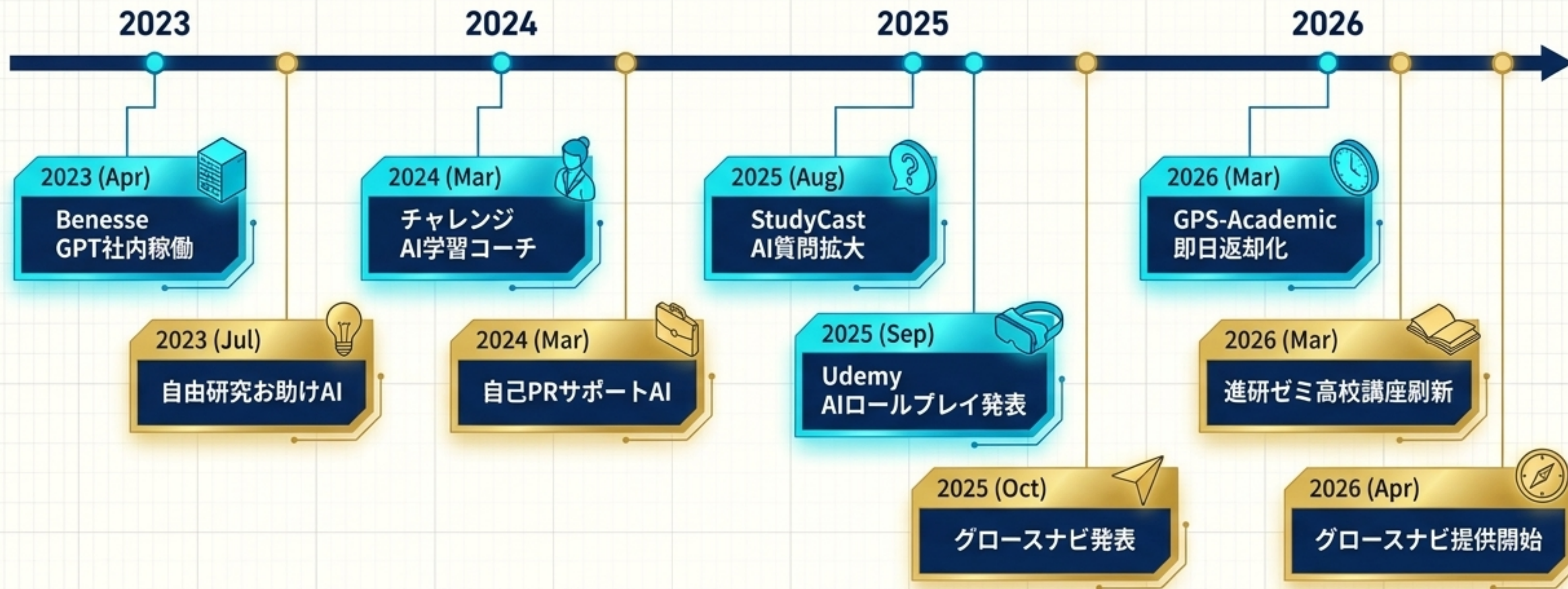
未来: 教育・キャリア・業務のAI統合基盤



競争優位性 (The Moat)

今後の勝敗を決めるのは「機能の数」ではない。ログ管理の透明性、監査手順、著作権処理、モデル更新時の影響管理といった「ガバナンスの密度」と説明責任が本格導入の鍵となる。

2023年の社内基盤構築から始まり、2026年に向けた 大規模な教育AIインフラの展開が進行中である



生成AIの本格導入に向け、学校・大学・保護者はそれぞれの立場で「人間の伴走」を再定義する必要がある

学校現場

「低リスク・高効果から小さく始める」

一律禁止や一律義務化ではなく、学校通信の下書きや要録素案、探究相談など、教員の負担軽減と安全性が両立する領域から着手する。



大学・企業

「“代筆者”ではなく“壁打ち相手”とルール化する」

完成された答えを作らせるのではなく、自己理解の整理や実践的ロールプレイの相手としてAIを位置づける。



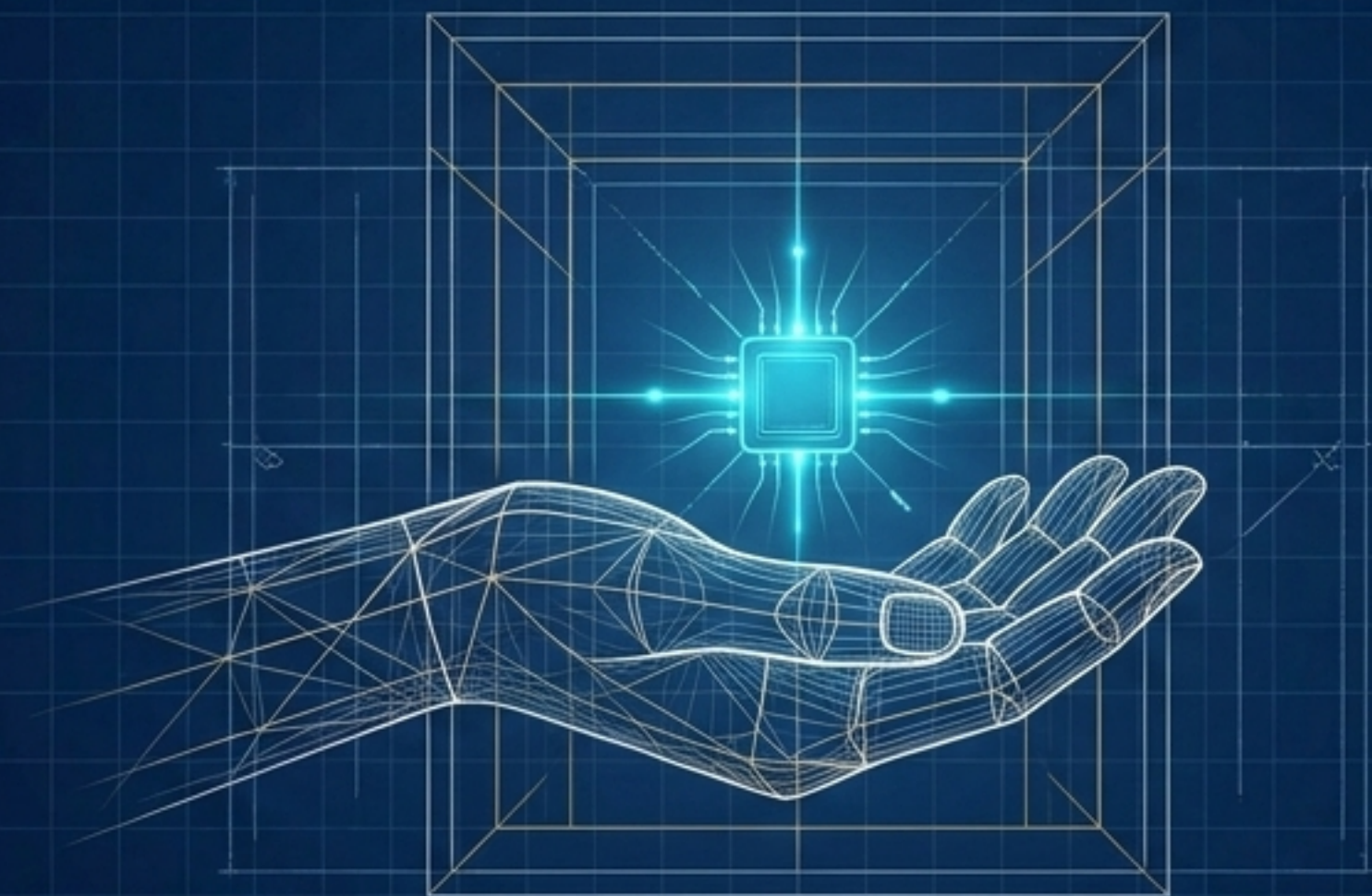
保護者

「監視ではなく、思考の言語化を促す会話ツールへ」

制限をかけるだけでなく、「なぜその答えになったのか？」をAIと子どもの横で問いかけ、リテラシーを育む伴走者となる。



**生成AI導入の是非を問う段階は終わった。
これからは「何をAIに任せ、どこに人間の判断を残すか」の設計論である**



ベネッセの事例は、AIを単なる効率化ツールとしてではなく、人間の認知発達に合わせた「伴走型プラットフォーム」として組み込むための最良の青写真を示している。

技術の進化に対し、強固なガバナンスと教育的意図をもってシステムを設計することこそが、次世代の教育インフラにおける唯一の最適解である。